

簿記初学者の特性に関する一考察

—学修動機・目的意識と学修達成度の関連を中心として—

山 根 陽 一

I はじめに

本研究の目的は、簿記初学者の学修に対する意識が学修達成度に影響を及ぼすのか否かを検証し、その結果から今後の簿記教育に資するインプリケーションを示すことにある。

我が国における簿記教育に関する先行研究は、簿記教育現場の実態調査や教員・学生に対するアンケート調査、日商簿記検定をはじめとする検定試験を対象に、簿記・会計関連の授業内容を取りまとめて分類したり、実施したアンケートの結果を分析したりすることで、教育現場の傾向について考察しているものが多く、客観的データに基づいた要因分析は、ほとんど行われていないのが現状である。また、教育者は、「～な学生は簿記がよくできる」といったように経験的に影響要因を認識しているが、これらを検証し、分析結果を共有することは、あまり行われてこなかった。

近年、中村（2015）や山根（2016a、2016b、2017）によって簿記の学修成果に影響を及ぼす要因分析が行われ、いくつかの観点でその実態が明らかになっている。中村（2015）では、国語や数学といった教科の得意・不得意や授業の出席状況などが入門レベルの簿記の成績に影響を及ぼすのか否かを検証しており、数学や理科といった理科系の科目および情報の得意度が成績に影響を与え

ることが示されている。山根（2016a）では、出身高校学科、入試種別、性別、現役・浪人別、出席率といった学修者の属性と簿記の成績の関連を検証しており、学力試験を経て入学した者ほど高い成績であること、出席率と成績に相関がないことが示されている。また、山根（2016b）では、出身高校偏差値や国語・数学・英語の成績、GPAといった学力指標と簿記の成績の関連を検証しており、GPA及び数学の成績が簿記の成績に影響を与えることが示されている。そして、山根（2017）では、学修過程における個別の学修項目の理解と簿記の成績の関連を検証しており、授業序盤で取り扱った簿記の一巡の理解が、簿記の成績に影響を与えることが示されている。

本研究では、簿記学修に対する学修動機・目的意識に焦点を当て、学修達成度との関連について、客観的データに基づいた統計処理を通して検証する。

II 調査内容および分析方法

1 対象授業の概要および分析対象者

本研究で分析対象としたのは、報告者が担当した大阪経済法科大学経済学部において開講された初級簿記である。初級簿記は、半期4単位（週2コマ）の全30回で実施している科目であり、学修範囲は日本商工会議所簿記検定試験3級（以下、日商簿記3級）である。なお、多くの履修者が、課外講座で6月または11月に実施される日商簿記3級に向けた学修をしている。

分析対象者は、2013年度から2016年度までの4年間の全履修者306名から、学修経験のバイアスの少ない普通科高校出身の1年生202名を抽出し、その中から授業出席率75%以上¹で各種データを把握できる最大147名とした。

1 対象者の授業における学修との関連の担保および試験対策の要領の良さといった他の要因を排除するために、出席率75%以上の履修者に限定した。

2 分析手法

分析は、簿記学修に対する学修動機の指標として、入試における志望理由書と授業初回の自己紹介の2点において、「会計専門職を志望する」、「簿記に興味関心がある」、「数字・数学に興味関心がある」との記述の有無を用いた。また、学修時の目的意識の指標として、授業期間中に実施された日商簿記3級の受験の有無を用いた。そして、簿記の学修達成度は、授業理解度²、期末試験の点数³、日商簿記3級の成績⁴を用いた。また、簿記学修に限定しない一般的な学修達成度として、対象授業と同期間の単位取得率とGPAを用いた。これらの7つの学修動機・目的意識に関する指標と5つの学修達成度の関連についてt検定を使用して検証した。

(1) 入試における志望理由書と学修達成度の関連性

学修動機の指標として、会計専門職志望、簿記への興味関心、数字・数学への興味関心の3つを使用した。なお、会計専門職志望は、志望理由書における「会計専門職」「会計士」「税理士」「国税専門官」「経理」「財務」の6単語の記述の有無の2区分で標本を作成し、簿記への興味関心は、志望理由書における「簿記」「日商」「検定」「資格」の4単語の記述の有無の2区分で標本を作成し、数字・数学への興味関心は、志望理由書における「数字」「数学」の2単語の記述の有無の2区分で標本を作成した。簿記の学修達成度として、授業理解度、期末試験の点数、日商簿記3級の偏差値を用い、一般的な学修達成度として、単位取得率とGPAを用いた。

「学修動機の有無と学修達成度には差はない」という帰無仮説を設定し、学修動機の指標と学修達成度（3項目×5項目）についてt検定を実施し、結果の

-
- 2 授業理解度は、各回における復習問題の正答率がおおむね7割を超える答案を理解しているものと判定し、復習問題21回分のうち、理解と判定した答案の割合を使用している。なお、復習問題によって問題数の多寡があり、点数評価ではなく7割の正答で理解・未理解を判定した。
 - 3 対象年度は、同様の学修項目・水準の問題を出題しており、同質性を確保している。
 - 4 同質性を確保するため、各回の得点を偏差値換算したものを使用している。

解釈を行う。なお、記述統計は、表1と表2のとおりである。

表1 記述統計：志望理由書の記述と授業理解度・期末試験・日商簿記の結果

区分	授業理解度			期末試験の点数			日商簿記3級の偏差値			
	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	
全体	66	68.0%	0.157	66	75.9	23.020	61	50.2	11.060	
会計専門職	記述あり	39	68.3%	0.158	39	76.2	20.884	38	50.1	11.611
志望	記述なし	27	67.5%	0.159	27	75.6	26.214	23	50.3	10.336
簿記	記述あり	56	67.0%	0.157	56	76.9	20.858	52	50.2	11.231
興味関心	記述なし	10	73.3%	0.150	10	70.5	33.620	9	50.3	10.646
数字・数学	記述あり	7	76.7%	0.243	7	88.6	13.138	7	54.8	6.712
興味関心	記述なし	59	66.9%	0.143	59	74.4	23.545	54	49.6	11.409

注1) 記述ありの平均値が良好な項目に網掛けをしている。

注2) 志望理由書は、AO・指定校推薦入試出願の際に提出されたものを使用しており、対象は66名となっている。また、日商簿記3級は未受験者を除く61名となっている。

表2 記述統計：志望理由書の記述と単位取得率およびGPA

区分	単位取得率			GPA			
	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	
全体	66	93.6%	9.974	66	2.61	0.710	
会計専門職	記述あり	39	93.4%	10.020	39	2.59	0.712
志望	記述なし	27	93.9%	10.092	27	2.65	0.720
簿記	記述あり	56	93.5%	9.795	56	2.59	0.687
興味関心	記述なし	10	94.1%	11.488	10	2.76	0.858
数字・数学	記述あり	7	95.2%	6.562	7	2.87	0.804
興味関心	記述なし	59	93.4%	10.329	59	2.58	0.700

注1) 平均値が良好な項目に網掛けをしている。

注2) 志望理由書は、AO・指定校推薦入試出願の際に提出されたものを使用しており、対象は66名となっている。

簿記の学修達成度との関連では、数字・数学への興味関心において、記述ありの平均値が高い傾向が確認できるが、会計専門職志望・簿記への興味関心では、記述なしの平均値が高いもしくは平均値の差が小さい傾向にある。一般的な学修達成度との関連では、数字・数学への興味関心において、記述ありの平均値が高い傾向が確認できるが、会計専門職志望・簿記への興味関心では、全ての項目において記述なしの平均値が高く、会計専門職志望・簿記への興味関心が一般的な学修達成度と関連がないことが伺える。

記述統計から、入学前における簿記学修への学修動機の有無は、学修達成度

との関連は確認できないが、これらに t 検定を実施することによって、統計的に有意な差が認められる項目を明らかにし、学修動機と学修達成度の関連について考察する。

(2) 授業初回の自己紹介と学修達成度との関連性

学修動機の指標として、会計専門職志望、簿記への興味関心、数字・数学への興味関心の3つを使用した。なお、会計専門職志望は、自己紹介における「会計専門職」「会計士」「税理士」「国税専門官」「経理」「財務」の6単語の記述の有無の2区分で標本を作成し、簿記への興味関心は、自己紹介における「簿記」「日商」「検定」「資格」の4単語の記述の有無の2区分で標本を作成し、数字・数学への興味関心は、自己紹介における「数字」「数学」の2単語の記述の有無の2区分で標本を作成した。簿記の学修達成度として、授業理解度、期末試験の点数、日商簿記3級の偏差値を用い、一般的な学修達成度として、単位取得率とGPAを用いた。

「学修動機の有無と学修達成度には差はない」という帰無仮説を設定し、学修動機の指標と学修達成度（3項目×5項目）について t 検定を実施し、結果の解釈を行う。なお、記述統計は、表3と表4のとおりである。

表3 記述統計：自己紹介の記述と授業理解度・期末試験・日商簿記の結果

区分	授業理解度			期末試験の点数			日商簿記3級の偏差値			
	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	
全体	142	69.1%	0.158	142	77.2	20.225	131	49.4	10.195	
会計専門職	記述あり	20	74.2%	0.203	20	84.0	19.167	19	53.2	7.950
志望	記述なし	122	68.3%	0.148	122	76.1	20.252	112	48.8	10.423
簿記	記述あり	49	73.1%	0.169	49	77.6	20.441	46	51.1	9.149
興味関心	記述なし	93	67.0%	0.148	93	77.0	20.219	85	48.6	10.668
数字・数学	記述あり	8	77.1%	0.201	8	88.1	5.303	7	54.8	7.095
興味関心	記述なし	134	68.7%	0.154	134	76.6	20.606	124	49.1	10.279

注1) 平均値が良好な項目に網掛けをしている。

注2) 初回授業にて、自己紹介を記述した者は142名となっている。また、日商簿記3級は未受験者を除く131名となっている。

表4 記述統計：自己紹介の記述と単位取得率およびGPA

区分	単位取得率			GPA		
	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差
全体	142	94.8%	8.898	142	2.80	0.698
会計専門職	記述あり 20	95.8%	7.541	20	3.01	0.748
志望	記述なし 122	94.7%	9.118	122	2.77	0.686
簿記	記述あり 49	96.1%	7.473	49	2.93	0.756
興味関心	記述なし 93	94.2%	9.537	93	2.73	0.658
数字・数学	記述あり 8	98.0%	3.803	8	2.91	0.773
興味関心	記述なし 134	94.6%	9.086	134	2.79	0.695

注1) 平均値が良好な項目に網掛けをしている。

注2) 初回授業にて、自己紹介を記述した者は142名となっている。

全ての項目において、記述ありの平均値が高い結果となった。記述統計から、授業開始時に学修動機の強い者は、学修達成度が高い傾向にあることが確認できる。さらに、これらにt検定を実施することによって、統計的に有意な差が認められる項目を明らかにし、学修動機と学修達成度の関連について考察する。

(3) 簿記検定受験の有無と学修達成度の関連性

学修時の目的意識の指標として、日商簿記3級受験の有無を使用した。なお、日商簿記3級は、受験の有無の2区分で標本を作成した。簿記の学修達成度として、授業理解度、期末試験の点数を用い、一般的な学修達成度として、単位取得率とGPAを用いた。

「目的意識の有無と学修達成度には差はない」という帰無仮説を設定し、目的意識の指標と学修達成度（1項目×4項目）についてt検定を実施し、結果の解釈を行う。なお、記述統計は、表5と表6のとおりである。

簿記初学者の特性に関する一考察

表5 記述統計：簿記検定の受験有無と授業理解度および期末試験の結果

区分	授業理解度			期末試験の点数		
	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差
全体	147	68.9%	0.156	147	76.6	20.976
日商簿記	受験	135	69.9%	0.155	135	77.2
3級受験	未受験	12	57.8%	0.123	12	70.0

注1) 平均値が良好な項目に網掛けをしている。

表6 記述統計：簿記検定の受験有無と単位取得率およびGPA

区分	単位取得率			GPA		
	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差
全体	147	94.8%	8.893	147	2.79	0.695
日商簿記	受験	135	94.9%	8.713	135	2.80
3級受験	未受験	12	92.8%	10.976	12	2.65

注1) 平均値が良好な項目に網掛けをしている。

簿記の学修達成度との関連では、日商簿記3級受験者の学修達成度が高い傾向にある。一般的な学修達成度との関連でも、受験者の平均値が高くなっているものの、その差は簿記の学修達成度と比較して小さい傾向にある。

記述統計から、日商簿記3級を受験した者は、学修達成度が高い傾向にあることが確認できる。さらに、これらにt検定を実施することによって、統計的に有意な差が認められる項目を明らかにし、学修時の目的意識と学修達成度の関連について考察する。

Ⅲ 分析結果および解釈

「学修動機の有無と学修達成度には差はない」という帰無仮説を設定し、学修動機の指標と学修達成度（7項目×5項目）についてt検定を実施した結果が、表7である。

表7 t 検定結果

学修動機・目的意識	授業理解度	期末試験	日商簿記	単位取得率	GPA
志望理由：会計専門職志望	0.192	0.103	-0.088	-0.198	-0.345
志望理由：簿記興味関心	-1.175	0.580	-0.036	-0.157	-0.695
志望理由：数字・数学興味関心	1.038	2.427 **	1.186	0.458	0.997
自己紹介：会計専門職志望	1.548	1.627	1.756 *	0.542	1.445
自己紹介：簿記興味関心	2.223 **	0.142	1.339	1.214	1.665 *
自己紹介：数字・数学興味関心	1.474	4.470 ***	1.440	2.128 *	0.444
日商簿記3級受験有無	2.633 ***	0.803	—	0.783	0.735

注1) * : $p < 0.1$, ** $p < 0.05$, *** $p < 0.01$ (両側)

入学前における学修動機の有無については、数字・数学への興味関心の有無が、期末試験の結果に5%以下の水準で有意な差が観察された以外に、有意な差は観察されなかった。数字・数学への興味関心については、中村（2015）において示された結果を追認するものであり、数学の得意不得意または興味関心の有無は、簿記の学修に影響を与えるものと推察される。ただし、差が確認されたのは期末試験においてのみであり、日商簿記3級に対しては差が確認されず、その影響は限定的である。また、入学前における会計専門職志望や簿記への興味関心は、学修成果に結びついていないことが伺える。

授業開始時における学修動機の有無については、会計専門職志望者が日商簿記3級に10%以下の水準で有意な値が観察された他、簿記に興味関心のある者が授業理解度で5%以下の水準で有意な差が観察され、GPAで10%以下の水準で有意な差が観察された。数学に興味関心のある者は期末試験において1%以下の水準で有意な差が観察された他、単位取得率に10%以下の水準での有意な差が観察された。授業開始時における学修動機は、入学前の学修動機と比較して、有意な差が確認された項目数が増加した。これは、授業開始時の学修動機の有無は、入学前のように学修までのタイムラグがなく、授業に直結しているためと考えられる。会計専門職志望者については、5%以下の水準で有意な差を得られない結果となったが、t値において、授業理解度、期末試験、簿記検定と内容が本格化するにつれ値が上昇している部分に特徴を見出せる。簿記への興味関心は、授業理解度において5%以下の水準で有意な差が確認されており、授業に対する関心の高さの表れと解釈できる。ただし、関心が期末試験、日商簿記3級といった学修成果に結びついていない結果となっている。数字・

数学への興味関心については、入学前の分析と同様に期末試験の結果に有意な差が確認されており、入学前よりも有意水準が高い結果となった。

日商簿記3級の受験の有無については、授業理解度において1%以下の水準で有意な差を観察しており、授業内容をしっかり理解している学生が結果的に検定試験を受験していると推察される。ただ、期末試験において検定試験受験者と未受験者との間に有意な差は確認されておらず、目的意識の有無が学修成果に結びついているとは判断できない。

なお、一般的な学修達成度については、5%以下の水準で有意な差は観察されなかった。簿記等に関する学修動機は、一般的な学修達成度に影響を及ぼしていないと推察される。

IV おわりに

本研究の目的は、簿記初学者の学修に対する意識が学修達成度に影響を及ぼすのか否かについて統計処理を通して明らかにすることであった。得られた結果は、①数字・数学に興味関心のある者は、期末試験において良好な成績を収めている、②簿記に興味関心のある者および日商簿記3級を受験している者は、授業理解度が高い、③会計専門職志望の有無は、学修成果に結びついていないというものであった。また、会計専門職志望の有無、簿記への興味関心、数字・数学への興味関心、日商簿記3級の受験の有無と大学における一般的な学修達成度との間には、有意な差は確認されなかった。

この結果から、学修に対する動機や目的意識が簿記の学修成果に結びついているものと推察されるが、その関連は限定的である。特に、目的意識よりも興味関心に有意な差が確認されており、会計専門職を目指すために学修するよりも、興味関心をきっかけとして学修するほうが、学修成果に結びついていることが伺える。これは、簿記の学修を何らかの手段として位置付けるより、簿記そのものへの興味関心に基づいたほうが、学修成果に結びつくことを示唆している。本研究は対象を学修前に限定した考察であるが、インプリケーションと

して、簿記教育において、簿記初学者に対して簿記の魅力を伝え、興味関心を喚起させることが有用であることが挙げられる。

簿記の学修成果に影響を与える要因は、無限に分析対象が存在し、学修意欲、基礎学力、学修習慣、生活習慣といった学力を構成する様々な要因が複合的に作用しながら構成されており、一概に結論を導き出すのは難しいと考えられる。また、本研究は、筆者が担当した授業を履修した学生を対象とした結果であり、直ちに一般化できるものではない。

参考文献

- 中村英敏 (2015) 「簿記の成績に影響を与える要因の分析—各教科の得意度・出席状況・性別等と成績に関する調査—」『日本簿記学会年報』第30号、75-83頁。
- 山根陽一 (2016a) 「初年次簿記科目における学習者の特性に関する分析—設問間と属性の関連を中心として—」『大阪経済法科大学 経済学論集』第39号第1・2号、51-65頁。
- 山根陽一 (2016b) 「初年次簿記科目における学習者の特性に関する関連性分析—学力指標と学習達成度の関連を中心として—」(日本簿記学会 第32回全国大会 自由論題報告 2016年8月21日)
- 山根陽一 (2017) 「関連性分析による簿記初学者の特性に関する一考察—項目理解と学修達成度の関連を中心として—」『会計教育研究』第5号、73-81頁。